朝日新聞

インスタント速記法（上）

「野球」は「ヤキ」に

ひらかなとカタカナを使う

国語・国字問題がやかましくなった折りからですが、これは一応、それとは無関係です。

講演を聞いていて、ちょっとこのたあたりをメモしようとするときとか、おぼえたいと思う歌の文句を書きとめておこうとするとき「もうちょっと早く書ければ楽なんだが」と思うことがときどきあるでしょう。すなわち、他人にはわからなくてもよい。自分にだけあとで読めればいいというメモや、話の要点だけを書きとめておくための手軽な速記がほしいところ。

ところが、本式の速記はまったく符号化したような線や点を使うもので、これを習得するのは本職に近いようなことになる。そこで、現在、日本の有力な速記の一つである中根式速記法をまとめた中根正雄氏は、速記法の法則を応用し、カタカナとひらかなさえ知っていれば、私たちが、いま使っている文字よりもずっと早く書ける即席早書き法を考案した。この早書き法は民間商社や自衛隊、警察などでも中根氏が指導してたびたび講習をしているそうです。

ここでは、便利な日用品のひとつといった意味あいで、中根さんからインスタント速記法を二回にわけて紙上紹介してもらいましょう——。

仏教に特有の略字

「京都へいったら、仏教の学生のノートを見ていらっしゃい。珍しい文字を書いていますよ」

これは私がよくいう言葉です。仏教では千年以上も前から、お経を早く書き写すために漢字の一部分をとり、たとえばおしゃかさまの釈迦（シャカ）を「尺力」、釈尊（シャクソン）を「尺寸」、地獄を「土犬」、娑婆（シャバ）を「女女」…などといろいろな略字を作っています。弘法大師の書の中に「𦬇」という字がありますが、これは「菩薩」（ボサツ）という字の両方のくさかんむりだけを取って書いた略字で「ササ菩薩」ともいわれます。こういう略字が今日まで伝わり、仏教の学生たちはノートはもちろんのこと、試験の答案にも使っています。

現に私たちも、早く書くためにはおのずといろいろな略字を使い、また「教育委員会」を「教委」というような書き方までしています。なるほど略字、略語を使えばそれだけ書くのが早くなるけれど、だからといって、ひとつ、ひとつ略字を作っていたのでは大へんです。

そこで、たとえば、現に私たちが「よ」も「ヨ」も同じに読んでいるのを、ひらかなとカタカナとで読み方をちがえるという発想からここにまとめたのが即席速記です。

ひらかなの読み方

カタカナは現在の通りに読み、ひらかなのうち、う列（うくすつぬふむゆる）お列（おこそとのほもよろ）は、ひらがなで書いただけで「ウ」をつけて、長く読むことにします。たとえば、

よ…ヨと読まず　ヨウ
と…トと読まず　トウ
こ…コと読まず　コウ
つ…ツと読まず　ツウ
そ…ソと読まず　ソウ

と読みます。そうすると、次のような便利な読み、書きができる。

【例】
こカ……効果
シよ……使用
ヨそ……予想
フつ……普通
ほそ……放送
どロ……道路
つこ……通行
こつ……交通
ヒこキ……飛行機

同じ音で意味の違うものは、ふつうのかな書きやローマ字と同様、前後の関係で区別する。

次はひらかなのい列（いきしちにひみり）ですが、これもみな読み方をかえ「ウ」をつけて長く読むことにする。たとえば

き…（キウ）　キュウ
し…（シウ）　シュウ
ち…（チウ）　チュウ
に…（ニウ）　ニュウ
り…（リウ）　リュウ

となる。これで、次の読み、書き

インスタント速記法（下）

きのろで一応、ひらかなの読み方を、全部かえましたが、これから、この読み方、書き方をもとにして、いっそうスピードアップしてゆきます。

つまる音

コッカ、ケッカなどとつまる場合は小さいッを書くが、このッを

ちのどれかです。これを人の名前のようにして「月一君」といっておきますが、上の方に小さい文字が書いてあれば、この「月一君」のどれかがはぶいてあるのです。いろいろに読めて区別しにくい場合は「月一君」の区別法もありますが、大体前後の関係で判断して読むようにしてください。次の例も

めば　列…レツ、益…エキ、改…カイ、日…ニチ、国…コク、新…シン…などのように、何かの次の音は必ずこの「月一君」のどれかになっています。それをいちいち書いても決して間違いではありませんが、こうしてはぶいてしまえば、一度に速度を高めることができます。